

## 付篇2

## 下松市御屋敷山古墳の出土遺物

横山 成己

## 1. 資料の由来(写真196)

埋蔵文化財資料館には、山口大学構内遺跡出土資料の他に山口県内各地の遺跡から出土した考古資料が収蔵されている。その多くは本学名誉教授である小野忠熙氏が本学在任中に調査を手がけた遺跡の出土品を埋蔵文化財資料館が継承したものであるが、収蔵される資料は膨大な数に上る。

その資料群中に「御屋敷山古墳第1号墳」と注記される3袋にまとめられた資料が存在する。この内、鉄釘<sup>註1</sup>と見られる多数の鉄片の劣化が著しく進行していたため、平成22年度に山口大学所蔵学術資産継承検討委員会に対し事業計画を提出し、鉄製品の保存処理事業を実施することとなった。平成22年度末に事業が終了したことを受け、本稿にて埋蔵文化財資料館所蔵御屋敷山古墳出土資料の調査報告を行うこととする。



写真 196 御屋敷山古墳出土鉄釘  
※保存処理前の状態

御屋敷山古墳は、下松市大字西豊井字御屋敷山にて発見された横穴墓である。昭和28年(1953)5月、御屋敷山浄水場建設工事の際に偶発的に発見され、小野氏らが下松市水道課と下松市教育委員会の委嘱を受け、発掘調査を実施している。その調査成果は小野氏により『山口県文化財概要 第4集』に掲載されているが、刊行よりすでに半世紀以上が経過した書籍であるため、現在では入手困難となっている。よって以下にその全文を転載する。

## 2. 小野忠熙氏による調査報告

## 3 御屋敷山古墳

下松市大字西豊井字御屋敷山

この古墳は石槨の羨道をもった横穴である。周防部には横穴や地下式土坑墓の発見例が少なく、したがって詳細な調査が行われていなかった。

昭和28年の5月、下松市西豊井の御屋敷山に浄水場の建設工事が行われた際、偶然その山腹から横穴が掘り出され、小野忠熙らが同市水道課と教育委員会の委嘱をうけて発掘調査を行った。

古墳は、下松平野の東部を流れる切戸川が平地に流れ出る谷口の右岸につきでた尾根の西側の中腹、標高にして36m、山麓からの比高約16mの地点に立地している。工事が行われる以前、すでに羨道の天井石と羨門が取り除かれており、さらに工事によって羨道の一部が損壊を蒙ったので全貌を知ることができないが、ほぼ元の状態を窺うことができる。

玄室に当る横穴は花崗岩の軟岩を掘り込み、その前に石槨の羨道が設けられていた。横穴の平面形は、幅2.54m、奥行2.18mで三味胴形を呈し、天井の高さは奥壁で95cm、中央が98cmで玄門に低まって65cmを測り、その長軸は羨道に対して直角である。羨道の長さはおおよそ2.22mで玄室よりも僅かに長く、玄門に接する部分の幅が1.3m、羨門は破壊されているので明らかではないが、約70cmと推定され羨門に向かって次第に狭まっている。天井石が遺存しないため、架構の構造を見ることはできないが、残存部の状態から推して、天井石の高さは玄門部に近い部分では玄門より約20cmばかり高かったようである。このような古墳の内部構造や、立地の微地形から推考すると、築成当時の外貌は、山腹の狭い段状の緩斜面に低い封土を盛った小墳丘をなしていたものと思われる。(第13図)

古墳の内部の床面には、玄室羨道ともに黄褐色の粘土が一面に流入し、さらにその上に黒褐色の土砂が堆積して上下両層とも玄門と羨道の接合部が高くなっていた。おそらく最初にこの部分が破壊して外部から雨水と土が流れ込み、内部を攪乱したために副葬品の位置をかえたものと思われる。

副葬品や他の遺物は、玄室の床面に接しているものもあったがほとんど流入土中に混在し、2個の金環と若干の鉄釘の断片が羨道から出土した。玄室には副葬後に破損した1個の平瓶、金環2個、鉄釘9個が遺存し、玄室のほぼ中央部の東南寄りに、長さ32cm、幅13cm内外の枕石1個が置いてあった。平瓶の高さは11.9cm、腹径14.4cmで口辺が歪んでいる。金環は長径1.3cmと1.4cm



写真 197 御屋敷山浄水場



写真 198 御屋敷山古墳推定地



- 1 上岡原古墳群 2 岡原古墳群 3 向原古墳群 4 日天寺古墳群(耳取前方後円墳) 5 花岡古墳群 6 花岡石棺群 7 花岡前方後円墳  
 8 惣ヶ迫古墳群 9 西村古墳 10 宮本古墳 11 宮原古墳群 12 常森古墳群 13 為弘古墳群 14 荒神山石棺群 15 山根古墳  
 16 荒神山前方後円墳 17 御屋敷山古墳 18 天王森西前方後円墳 19 天王森前方後円墳 20 大河内古墳群 21 寺迫古墳

図 78 周辺古墳分布図

の2個で、その断面は長楕円形を呈し、銅製の環に金箔を巻きつけた類である。(第12図)

埋葬の遺骸は何一つのこっていないが、諸種の条件からもとのもとの埋葬状態をある程度推測することができる。釘の断片がかなり沢山のこっていることからみると、被葬者は木棺に収納して葬られたものと見るべきであろう。また枕石の長軸が玄室の長軸に直角で、しかもほぼ頭部を置く位置にある点を考え合わせると、東南部に頭を置いて羨道に直角の方向に伸展葬されていたように思われるが、木棺に石枕を入れて埋葬することの当否が問題として残される。

この横穴は横穴墳の初期の形態をもち、羨道が長くかつ石槨を設けていることや、副葬品が少ないことなどから考えて、横穴式石室墳から横穴墳に移る過渡期の一様式とみることができよう。

横穴がある御屋敷山の浄水場付近には、弥生式後期の末(一部に古式の土師器)の村落址や壺棺墓があったが、横穴墳とともにその主要部が工事のため取り除かれてしまった。なおこの地から出土した土器や壺棺は、現在下松市教育委員会に保存されている。(文献1 15~16頁)

### 3. 御屋敷山古墳の位置(図78、写真197・198)

古くに調査が実施された遺跡ということもあってか、発掘調査報告書や研究論文等における御屋敷山古墳の位置は一定していない。一例を<sup>註4</sup>図78に挙げるが、御屋敷山浄水場よりはるか離れた場所にドットが落とされている。本稿を執筆するに当たり、筆者も浄水場付近の踏査を行った。浄水場敷地は立ち入り禁止区域が広く、敷地全域の踏査は断念したが、小野氏の「谷口の右岸につきでた尾根の西側の中腹、標高にして36m、山麓からの比高約16mの地点に立地している」との記述を重視し、素直に標高36m付近の御屋敷山浄水場建物下の整備された西側法面、または浄水場進入道路付近を御屋敷山古墳の旧在<sup>註5</sup>地と推定しておく。

### 4. 埋葬施設の構造と遺物出土位置(図79)

本墳は、「花崗岩の軟岩を掘り込み、その前に石槨の羨道が設けられていた」と報告される。横穴式石

文献3 掲載「第13図 横穴実測図」  
をトレース・一部加筆

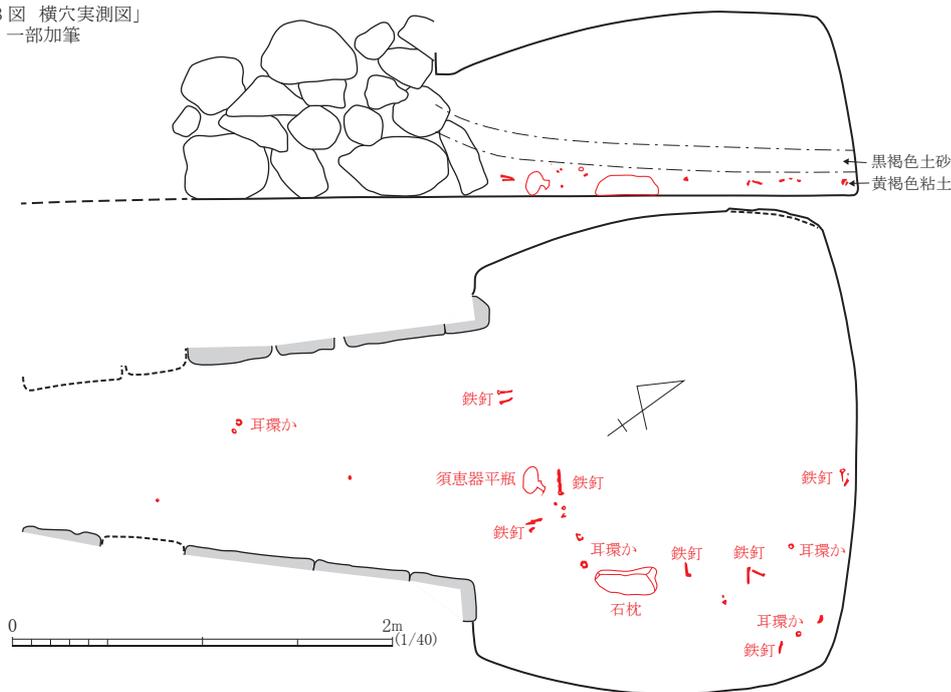


図79 御屋敷山古墳平面図・断面図

室羨道状の石組み施設は、山口県で確認されている横穴墳では特異な構造であり、御屋敷山古墳の特徴の一つと言える。一方で、図示された羨道部石組みを見ると極めて乱雑に積み上げられているように感じられる。さらに「工事が行われる以前、すでに羨道の天井石と羨門が取り除かれており」という記述が存在すること、周囲の地形を含めた羨道部の横断面が掲載されておらず、石組みがどのような工程を経て構築されているのか不明であることなどから、この石組み羨道部が横穴墓築造時に構築されたと断定して良い状況にないと考える。後述するが、出土遺物から見て後世に盗掘を受けている可能性が高く、開口後に埋葬施設以外の用途で使用された可能性を排除できない。

遺物出土位置に関しても、小野氏は自然作用による遺物の攪拌を推定しているが、遺骸の追葬を常態とする横穴墳としては極めて副葬遺物が少なく、その遺存状態も良好とは言いがたい。筆者はこれを人為的な攪拌(盗掘)と推測する。また報告文中に羨道から2点、玄室から2点出土したとされる金環(耳環)に関しても、平面図に示された遺物出土状況からはその出土位置を特定できない。平面図には環状に描かれた遺物が少なくとも6ヶ所に見られる。報告に図示された耳環は2点<sup>註6</sup>だけであることも混乱の一因となっている。

## 5. 出土遺物(図80、写真199～203、表16・17)

埋蔵文化財資料館に収蔵されている御屋敷山古墳出土遺物は、須恵器平瓶1点、須恵器坏1点、土師器高台付埴1点、鉄釘12個体、そのほか図化不能土師器・弥生土器体部小片である。土器資料には小片に至るまで全て「御屋敷山(オヤシキ)古墳第1号墳」と注記されており、当墳から出土したことは確実である。なお、出土したとされる石枕と耳環に関しては、埋蔵文化財資料館では未だ確認に至っておらず、収蔵の可能性のある下松市生涯学習課分室においても発見に至っていない<sup>註7</sup>。本稿では、現在確認できている遺物のみを対象に報告を行う。

1は須恵器平瓶。小野氏報告に掲載されている資料を再実測した。現在資料は接合・復元がなされているため、断面図内面ラインは小野氏報告図と合成した。扁平な器形であり、胴部に稜を有する。口縁一頸部は大半を欠失しているが、頸部は緩やかに開き口縁を直立気味に立たせている。口縁遺存部は片口状に窄まっているが、これは焼成時の歪みではなく、意図的なつくりと思われる。体部外面調整は、底部が回転ヘラ削り、体部下位は回転ヘラ削り後ナデ、体部中一上位は不定方向のナデが施されており、明確な回転ナデ調整は観察されない。なお、カキ目は施されていない。残高12.2cm、復元口径長軸7.15cm、短軸5.9cm、胴部最大径14.1cm、底部径3.85cmを測る。2は小型の須恵器坏で、坏G類に分類される資料である。小片であるため径の復元は困難であるが、歪みが少ない資料とすれば、底部径約6.5cm、口径は8～9cm内外に復元される。ここでは、遺跡の理解のため口径8cmで復元し図示する。平底の底部はヘラ起こし未調整であり、体部はほぼ直立して立ち上がり口縁に至る。口縁は尖り気味に丸く収め、口縁内面に凹線が1条巡る。3は高台付土師器埴。高台径より反転復元を行っている。底部の大半を欠失している個体であるが、貧弱で低い断面偏台形の高台が付く。体部は大きく開きながら立ち上がり口縁に至る。口縁端部は尖り気味に丸く収めている。器面の色調から重ね焼かれた状況を窺い知ることができる。復元口径17.5cm、高台外径8.0cm、器高4.3cmを測る。

i1～i15は鉄釘。木棺の留め具に用いられたものであろう。この度の保存処理事業により、釘頭部が遺存する個体から計測して少なくとも12個体が存在することが確認された。埋葬された木棺が1棺であれば、少なくとも12個以上の鉄釘を用いたものであったことになる。多くは頭部をL字形に折り曲げられているが、i5・i11は湾曲させており注意が必要である。ほぼ完形に遺存するi1～i5の全長は8.6～11.1cmを

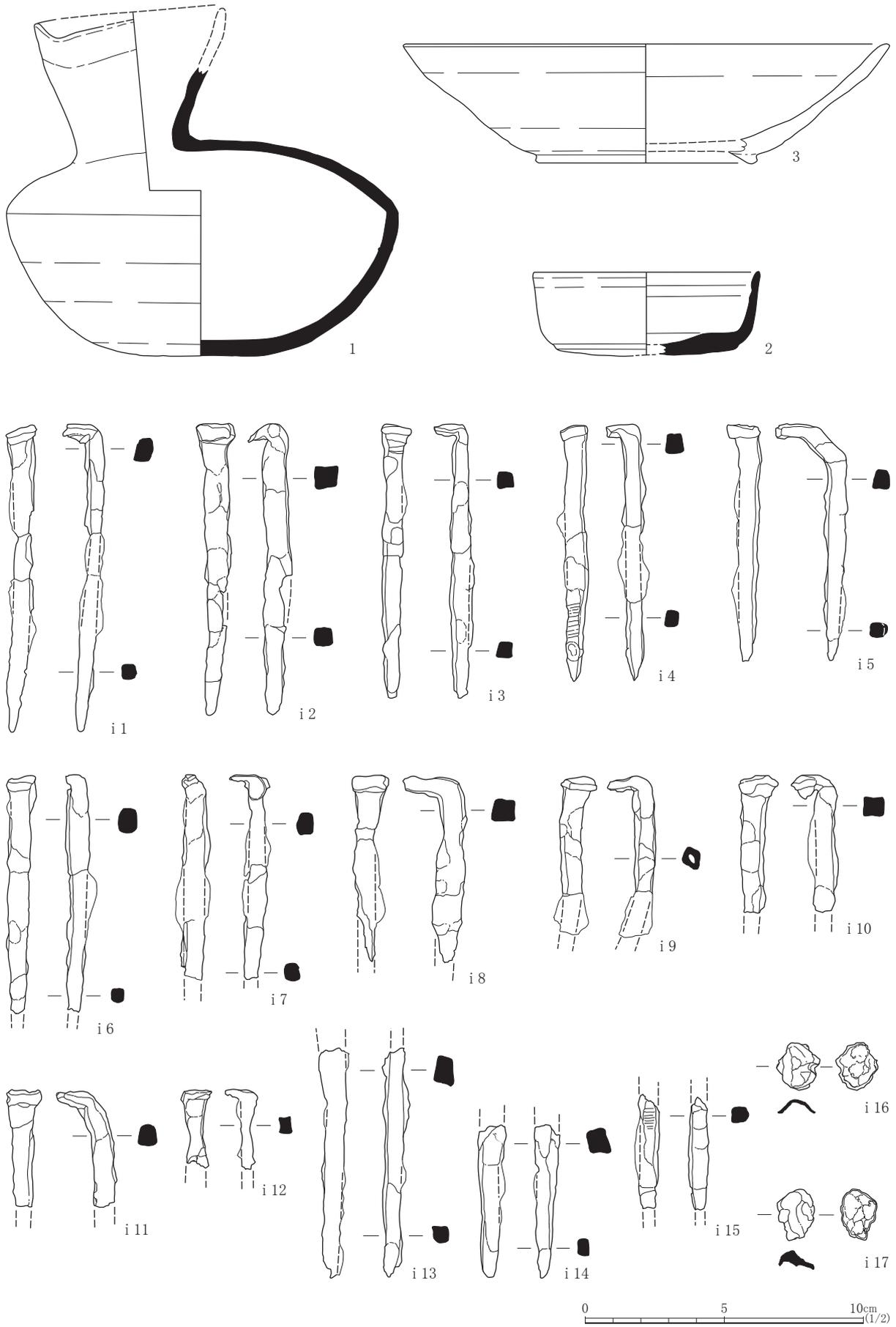


図 80 出土遺物実測図



写真 199 出土遺物 (土器)



i1



i2



i3



i4



i5



i6



i7



i8

※ほぼ実寸

写真 200 出土遺物 (鉄製品)①



i 9



i 10



i 11



i 12



i 13



i 14



i 15



i 16



i 17

※ほぼ実寸

写真 201 出土遺物（鉄製品）②



写真 202 鉄製品 X 線画像①



写真 203 鉄製品 X 線画像②

表 16 出土遺物（土器）観察表

法量( )は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	備考
				①口径②底径③器高	①外面 ②内面		
1	御屋敷山古墳	須恵器 平瓶	ほぼ 完形	①7.15(長軸) 5.9(短軸)②3.85 ③12.2	①②灰色(5Y6/1)	密(2mm以下の砂粒を極少量 含む)	口縁が 片口状
2	御屋敷山古墳	須恵器 杯身	口縁部 ～底部	①(8.1)②(6.4) ③3.0	①②灰色(N5/)	精緻	内面口縁下 に凹線が巡 る。平底に 近い底部は へら起こし未 調整。
3	御屋敷山古墳	土師器 埴	口縁部 ～底部	①(17.5) 高台径8.0③4.3	①灰色(5Y6/1) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	やや粗(0.1～1.5mm程の砂 粒を少量含む)	低く小さな高 台部。口縁 端部はやや 尖り気味に 丸く収める。

表 17 出土遺物（鉄製品）観察表

法量( )は復元値

遺物 番号	遺構	種別	法量(cm)	備考
i 1	御屋敷山古墳	鉄釘	全長11.1 重量10.31g	
i 2	御屋敷山古墳	鉄釘	全長10.6 重量15.48g	
i 3	御屋敷山古墳	鉄釘	全長9.9 重量9.58g	
i 4	御屋敷山古墳	鉄釘	全長9.3 重量10.66g	有機質痕
i 5	御屋敷山古墳	鉄釘	全長8.6 重量11.06g	
i 6	御屋敷山古墳	鉄釘	残存長8.6 重量10.33g	
i 7	御屋敷山古墳	鉄釘	残存長7.5 重量12.22g	
i 8	御屋敷山古墳	鉄釘	残存長6.8 重量12.29g	
i 9	御屋敷山古墳	鉄釘	残存長5.8 重量8.80g	中空化
i 10	御屋敷山古墳	鉄釘	残存長5.1 重量8.83g	
i 11	御屋敷山古墳	鉄釘	残存長4.3 重量5.32g	
i 12	御屋敷山古墳	鉄釘	残存長2.9 重量2.74g	
i 13	御屋敷山古墳	鉄釘	残存長8.3 重量8.41g	
i 14	御屋敷山古墳	鉄釘	残存長5.5 重量5.79g	
i 15	御屋敷山古墳	鉄釘	残存長4.1 重量3.81g	有機質痕
i 16	御屋敷山古墳	不明鉄片	残存長1.8 最大幅1.5 最大厚0.5 重量0.46g	
i 17	御屋敷山古墳	不明鉄片	残存長1.8 最大幅1.4 最大厚0.7 重量1.23g	

測る。i16・i17は小片であり、鉄釘頭部が錆膨れ折損した資料と思われる。今回鉄釘として報告する資料はいずれも断面方形であるが、一部資料が中空化したものもある。

## 6. 小結

御屋敷山古墳の発掘調査は、第2次世界大戦後、文化財保護法が施行された直後に山口県において実施された緊急発掘調査の1事例である。自治体において埋蔵文化財保護体制が整わない中での調査であり、関係諸氏が多大なる労力をはらい、遺跡の記録保存に努めたことを窺い知ることができる。

遺跡が消滅したと推測される中、出土遺物の所在確認に努めたが、確認された資料は断片的なものであった。本墳の築造・使用時期に言及するには、須恵器平瓶と須恵器坏しか根拠がない状況にある。その状況下であり、さらに山口県東部の須恵器編年が不定立である中で敢えて築造時期を考察するならば、近年提示された青島啓氏の論考<sup>註8</sup>を参考としたい。青島氏の論考は結果的に伝統的な須恵器編年観を重視し、かつ当県における既往の須恵器編年を考慮に入れたものとなっている。提示された編年観は主として県央部から県西部の瀬戸内沿岸部出土品を用いたものであり、県域全てに適合するものでは

なかろうが、筆者は御屋敷山古墳出土須恵器坏G類は概ね氏の③期、平瓶は④期に該当するものと考えており、実年代に関しても前者が7世紀中頃、後者が7世紀後半と考えている。この年代観に即して、小野氏の「横穴式石室墳から横穴墳に移る過渡期の様式」という考察をひとまずは保留したい。現状において山口県瀬戸内沿岸部における横穴墓の確認事例は少ないが、かろうじて近隣地と言える永源山横穴墓の埋葬施設構造、出土遺物の年代観は御屋敷山古墳事例と大きな乖離を見せており、軽々に遺跡評価を行える状況にない。

また、土師器高台付埴の存在から、吉瀬勝康氏の編年観を参考とし、当墳は少なくとも12世紀後半から13世紀の初頭にかけて盗掘を受けているものと推測する。

御屋敷山古墳発掘調査実施より半世紀を超え、本稿においてようやく基礎的な資料報告を行うことができた。今後も、筆者が所属する施設にてほぼ死蔵された状態にある未報告資料をできる限り公開し、世に問う所存である。

本稿を結ぶに当たり、下松市生涯学習課分室室員宮田幸治氏には多大なる協力、助言をいただいた。また、当館補佐員である乃美由香、松浦暢昌にもトレース、表作成等において援助を得た。末筆であるが記して感謝の意を表したい。

#### 【註】

- 1) 収納NO.05-027、25-011、93-025(収納コンテナ番号-収納袋番号)
- 2) 遺物収納袋内のカードには「御屋敷山古墳第1号墳」の記入があり、遺物にもそのように注記されているが、現在周知の埋蔵文化財包蔵地名は「御屋敷山古墳」であるため、その名称に従う。
- 3) 文献3参照
- 4) 文献7「第1図 為弘古墳群と周辺の古墳の位置」を転載、一部加筆。
- 5) 文献2の御屋敷山古墳に関する報告では、筆者の推定地する遺跡地の北西隣に伸びる丘陵にドットが打たれており、かつ「他に数機の古墳が分布」との記述も見られる。筆者も周辺地を探索したが、古墳らしき痕跡は確認できなかった。今後再調査を行いたい。
- 6) 文献3「第12図 平瓶・金環実測図」。耳環は写真掲載と見られ、断面が付加されている。小野氏は他書にて御屋敷山古墳出土品を「金環2個、鉄釘4個と須恵器の平瓶1個」としている(文献4)。
- 7) 下松市生涯学習振興課分室での存否確認は、室員である宮田幸治氏に協力を依頼した。
- 8) 文献1参照
- 9) 分解9参照
- 10) 文献8参照

#### 【文献】

- 1) 青島啓(2012)「7世紀の須恵器生産と年代観—防長の須恵器—」,九州古文化研究会(編)『古文化談叢』第67集,福岡
- 2) 宇野慎敏(2002)『山口の古墳』,九州・山口古墳時代研究会(編),北九州(福岡)
- 3) 小野忠熙(1961)「3 御屋敷山古墳」,小野忠熙・山口県教育委員会(編)『山口県文化財概要 第4集 埋蔵文化財』,山口
- 4) 小野忠熙(1985)『山口県の考古学』,吉川弘文館,東京
- 5) 山田康弘ほか(2000)『常森古墳群』,土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム(編),豊北(山口)
- 6) 山本一郎(1998)『惣ヶ迫古墳』,下松市教育委員会(編),山口
- 7) 山本一郎(1999)『為弘古墳群発掘調査報告』,下松市教育委員会(編),山口
- 8) 吉瀬勝康(2004)「土師器」,山口県(編)『山口県史』資料編 考古2,山口
- 9) 渡辺一雄(1982)「永源山横穴墓」,山口県文化財愛護協会事務局(編)『山口県文化財』第12号,山口